

食品の安全・安心管理、 福島勝利宣言を！

宇野 賀津子

Uno Kazuko

((公財)ルイ・パストゥール医学研究センター
基礎研究部 インターフェロン・生体防御研究室 室長)



2014年2月に開かれた、福島県の実験科等の教職員の研修会のことである。参加者から、「放射能を減らす食事というのがありますが」と質問された。福島の実験科の授業では“放射能を減らす食事”の授業も必要かとの問いだったので、「食品の放射能汚染もほとんど基準値以下、ホールボディーカウンター検査でも、ほとんどの方が基準値以下であるのに、そんな教育必要ですか。むしろこれから必要なのは、減塩や抗酸化食といった健康のための食事ではないですか」と答えると、先生方の顔が明るくなったように感じた。

実際、2012年にコープ福島の実験科の結果を知った時は、放射性Cs濃度のあまりの低さに驚いた次第である。これらの結果は、たとえ福島県産であっても流通している物を食べている限りは、食事による放射性Cs摂取を心配しなくても良いことを明らかにしていた。またホールボディーカウンター検査の結果は、ほとんどの方が測定限界以下であった。有意な値が検出される方はわずかであり、その場合も食べられた食品をお聞きすると、原因となる食品が特定できた。チェルノブイリ周辺では、今なおホールボディーカウンター検査の結果や食品に有意な値が検出されていることから、事故後3年目の福島県の実験科にはもっと、皆さん自信を持って良いのではと思う。

食品の放射能検査も2012年春には福島県内で500台ほどの測定器が稼働していて、家庭菜園の食品も測れる体制ができていた。米の全袋検査体制も含め過剰なまでの検査体制の確立により、食品の安全・安心管理体制はかなりのレベルで担保されたと思った。これらの結果は、福島県の実験科関係者やきちんと測定するためにエネルギーを注がれた技術者と、それを支援した研究者の努力の賜ではないだろうか。それでも、福島県内で「家庭菜園の物は、祖父母が食べても孫には食べさせられねえ」という声もよく聞く。測って確認するというのもしないで、決めつけている。そんなことでは、風評被害の払拭は難しいだろう。

メディアは福島第一原発の汚染水のことを言っても、福島県の実験科のほとんどの方が基準値以下であることはまず報道しない。初期の混乱期の“科学不信”がいまだ尾を引いていると感じている。何よりも食の放射能汚染については、福島県は管理できていることに自信を持つてくのではないか。そして福島県の実験科の安全・安心管理、勝利宣言をしても良いのではないだろうか。何よりも内に向けて、そして次に外に向けて。コープ調査に関わられた方のお一人は現在の福島県の実験科を、「混乱期を経た後に地道な努力による実測データが出そろい、ようやく科学的知見にのっとって冷静に受けとめ判断し行動する段階に入りつつあるかな」と語っている。測って、確認して、そして食べるか食べないか決めるという科学的思考へ導くためにも、“食品の安全・安心管理、福島勝利宣言”をして、まずは福島県の方々が自分たちの努力と成果に自信を持たれてはどうだろうか。